

教師の紐帯形成に関する研究 : 学校内外における同 教科教師間の関係に着目して

兼安, 章子

<https://hdl.handle.net/2324/2236008>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (教育学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 兼安章子

論 文 名 : 教師の紐帯形成に関する研究
—学校内外における同教科教師間の関係に着目して—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、紐帯が教師にとってどのような意味を持つものであるかを明らかにすることを目的とする。そのため、教師が保有する紐帯について個人を中心に描き出すことを通して、学校内・外という枠組みを超えた授業に関する教師の紐帯とそれらの特質、紐帯形成のプロセスを明らかにする。

まず第1章においては、方法論として、教師間の紐帯の検証のために、社会ネットワーク分析と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いることを示した。学校外の関係に焦点化するため、主に一人職である中学校家庭科教師を対象とする。また、教師の職務全般にかかわる紐帯ではなく、授業に限定した関係性を特に検討するため「教材」に着目することとした。

第2章においては、社会ネットワーク分析を用いて同教科教師との固定化した紐帯について分析した。限定的な関係が固定化する紐帯は、前任者との関係を構築する引継ぎ型と、研究発表などで同一及び近隣市町村内の教師らが共同で教材開発などを行う場合のみに情報交換や相談を活発化する短期集中型の2つと捉えることができた。短期集中型の紐帯は弱い結合により成立しているが、必要に応じてその強さが発揮されている。

第3章においては、社会ネットワーク分析を用いて、学校外と同教科教師との紐帯形成の変化について分析した。同一及び近隣市町村内の教師との紐帯を形成している教師については、教師個人の紐帯形成と展開の契機として、集団への窓口となる教師の存在が機能する可能性を指摘した。このように、仲介者を介して形成される紐帯は仲介者型と位置付けられる。紐帯間における教材の貸借及び開発の実態から、紐帯自体を教師にとっての資源として捉えることができる。

第4章においては、社会ネットワーク分析を用いて、比較対象とする中学校理科教師の紐帯を分析した。家庭科教師との比較という点において、教材の貸借は、理科教師にも確認されたが、共同の教材開発は、家庭科教師のみに確認され、共同開発は家庭科教師の紐帯における顕著な行為であると考えられる。

第5章においては、M-GTA を用いて教師の紐帯形成プロセスを分析した。そのプロセスとして、[関係構築の糸口] となる教師と出会い、[共同で行う職務] を重ね、最終的には [相手への貢献] に至ることが確認された。

第6章においては、M-GTA を用いて教師の教材貸借及び共同開発のプロセスを検討した。教材の貸借や共同開発のプロセスにおいても、研究発表という公的な催しに合わせて発生する行為が契機となり、その後の教材の貸借などへと展開していた。家庭科教師が形成する紐帯は、家庭科という「領域」において、情報を含む教材や教材開発を「実践」として共有しており、実践コミュニティとして成立していた。

本研究では、教師にとって紐帯の特質、意味やその形成プロセスを検討した結果、以下の知見が

得られた。

まず、紐帯形成における仲介者の役割の重要性を指摘することができる。ここでの仲介者は、集団間を結ぶハブやメディアとしての機能ではなく、同一の集団の一員となり得る点に特徴がある。当該教師が仲介者との紐帯を形成した後に、その他教師との紐帯形成を促す役割を果たす。特に仲介者の存在が後の仲介者以外の同一及び近隣市町村内の教師らとの紐帯の形成、教材の借用や共同開発などの紐帯の活用をより円滑にすることに寄与している。

次に、教師自身が認識していない紐帯間においても情報や教材貸借などが行われており、ある種の弱い紐帯の強さが発揮されていた。一方で、これはベネフィット重視の行為であるともいえる。教師は知り合いである教師の中から、授業に関する情報やアドバイス、教材借用などのベネフィットが得られる相手や機会かどうかを判断し、意識的にその関係を強化したり緩やかに保持したりしていることが示唆される。教師のベネフィット重視の行為は、教師が紐帯を資源として捉えていることを示していると同時に、教師の紐帯活用戦略として位置付けることができる。

教師間における教材の貸借や譲渡は、教師自身の紐帯の認識を示す行為であることに加え、教科教師としての承認を得るものであることが示された。この承認とは、単に個人としての承認ではなく、教科の専門性を持つプロフェッショナルとして後ろ盾になるものである。紐帯という二者間においても行われているという点で特徴的である。

また、教師が形成する紐帯は実践コミュニティとしての側面を持つことが導かれる。実践コミュニティは、教師が認識する紐帯間において確認されており、教師が自治体などの行政区分にかかわらず、実践コミュニティをベネフィットとして求めた結果であると解釈する。

以上のように、教師個人がどのような人的資源を保有しているかという枠組みでの検討により、学校組織やその他の集団を基準とした関係に限らず、教師間関係の一端を解明することができた。これらの知見は、学校外の教師らとの関係の検討における基盤となるものであり、発展可能性を含むものである。